049
Sh15
049-Sh15ウ
1200500724480

始

049
Sh15

天地理談

村岡典嗣校

司馬遷言

岡書院藏版

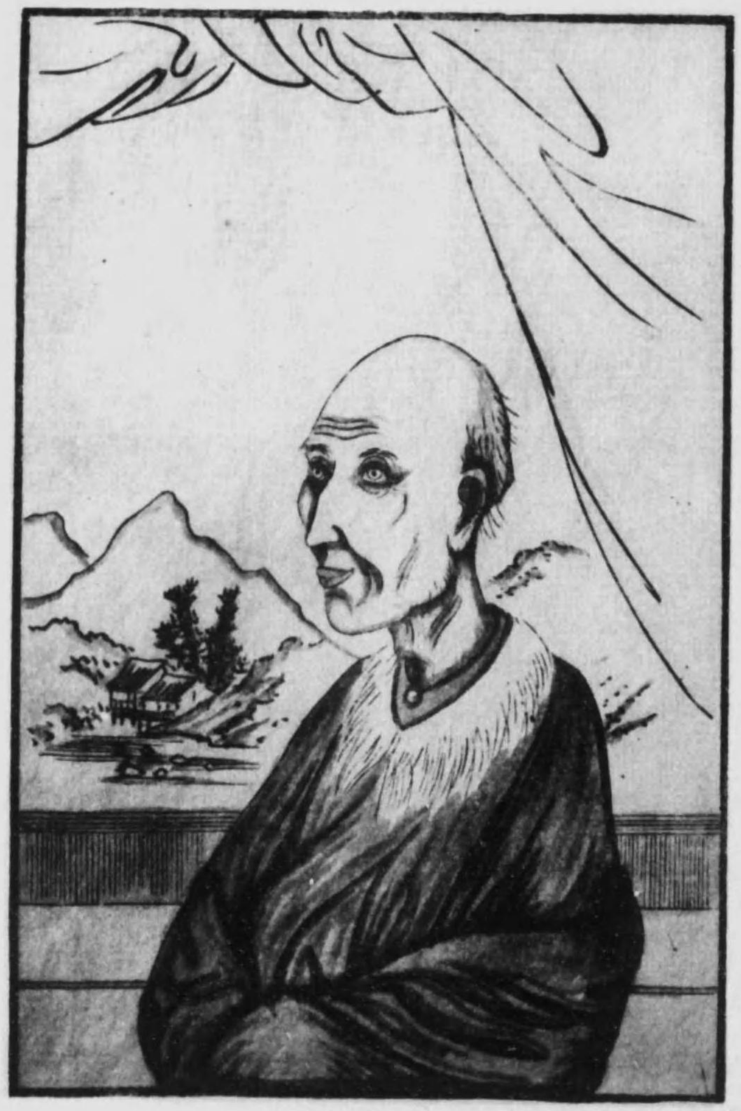
司馬江漢自畫像

（刻白爾天文圖解所載）

（原木・木版美濃判）

后漢五美自畫像

（陝白鶴天文圖書館藏）



（孤本，未經美術院）

第二號

天地理談

（乾裏紙）

（原本、江漢自筆稿本半紙判）

天地理類（算數類）

（明治五年自筆稿本中編）

第三號

天地理談（乾一丁ノ巻）

（同前）

天典聚雑（第一丁ヘ裏）

無言道人筆記

或問百人同夢ハ現中皆云ハ誠ノ者ト
或ハ大ニ異ル滿座ノ中ニ同ジ用ヒ見ル
ノ夢ナレ何トソ目ニ視ルノ夢ヲ覩タリト云ハ
同五彩ノ色ヲ知ヤ君ヤ不知五彩ハ色ト云
物ノ名ニシテ之ヲ麈ヘ云ハ幸ハ赤キ色鹹キ
ハ青色耳ハ白色酸ハ黄色苦ハ黒色亦五
音ノ比ヒ

吾日本天下ノ誠ヲ以テ伝アリ

（同　前）

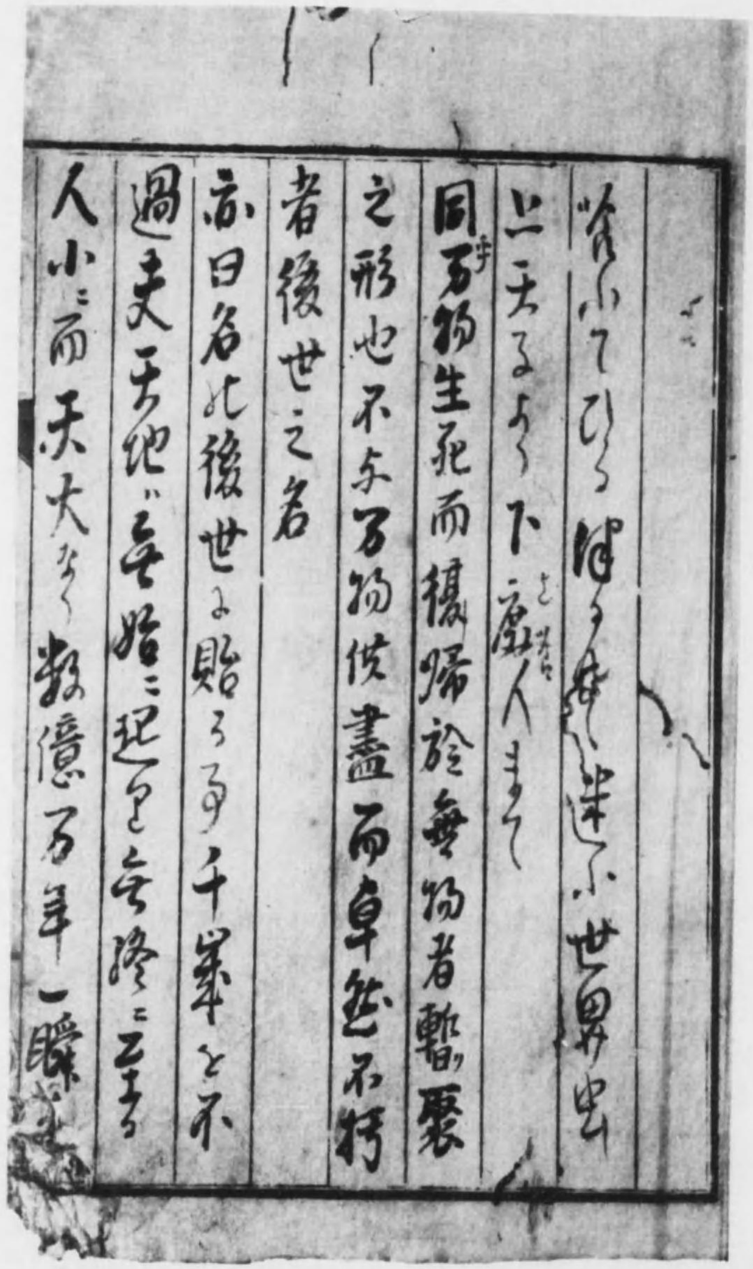
第四號

天地理談　（坤一丁ノ表）

（同　前）

天地壓類（軸一七ノ表）

（同　前）



皆小て広く始て出て世界出
出天るよりて下人まで
同万物生死而復歸於無物者暫聚
之形也不知万物使盡而卓然不朽
者後世之名
亦曰名は後世より貽る千年を不
過夫天地は幾昭昭たる陰陽にして
人小にして天大なり数億万年一瞬

第五號

天地理談

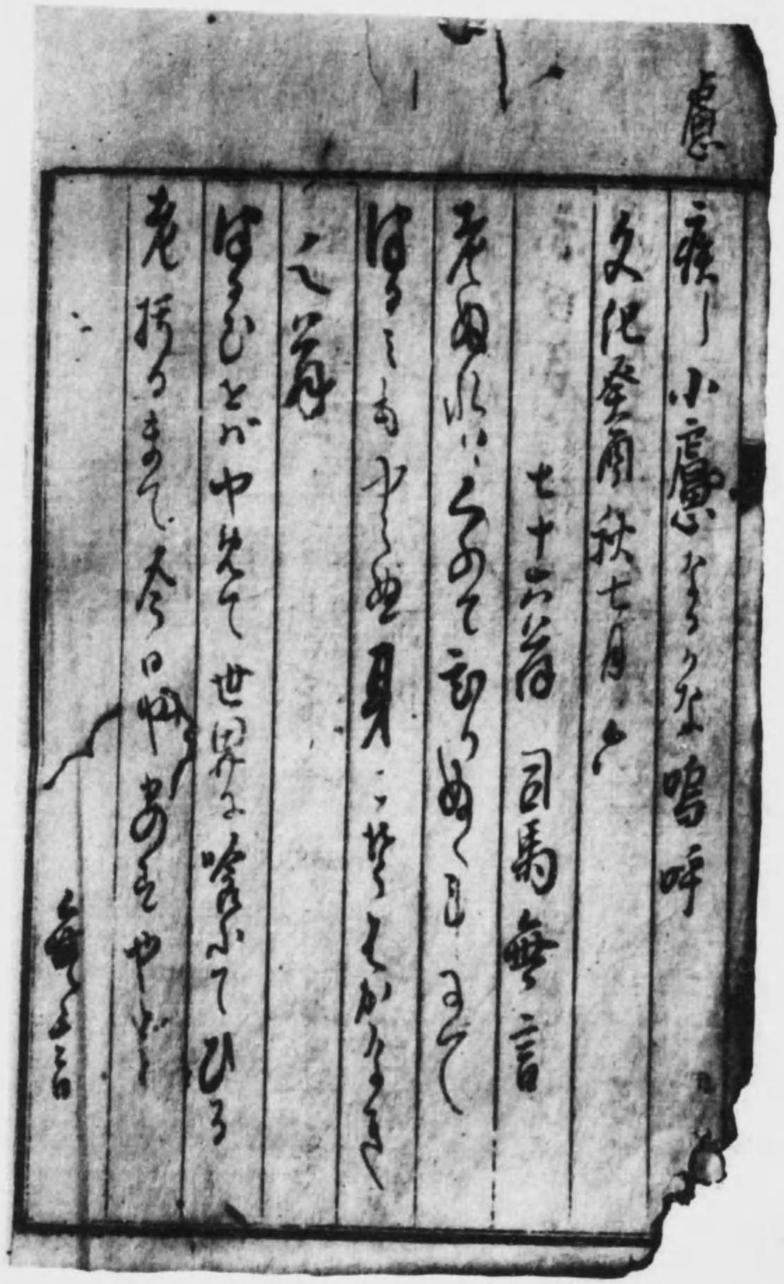
（坤一丁ノ裏）

（同　前）

天地類

（同　前）

（壯一丁ノ裏）

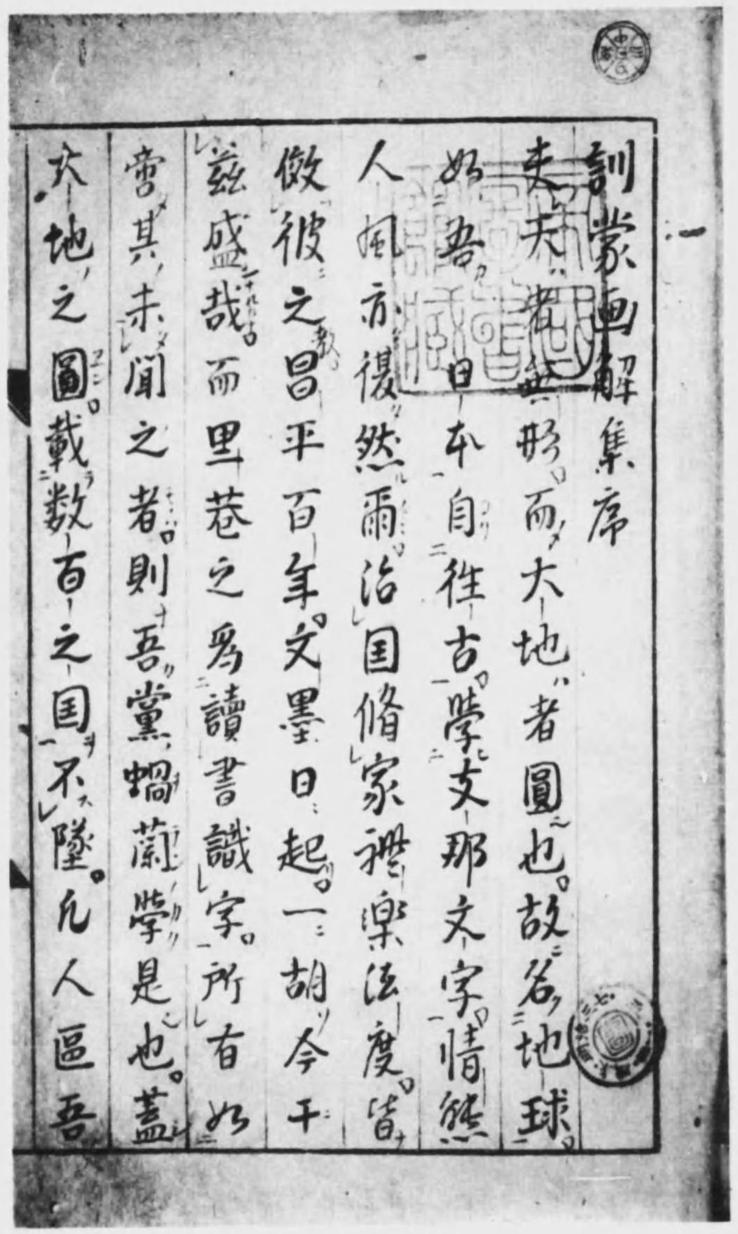


第六號

訓蒙画解集（序文）

（原本、江漢自筆稿本美濃判）

訓蒙画解集序 （文）



夫天者無形而大地者圓也故名地球如吾日本自往古學文那文字情然人風方復然爾治国脩家禮樂法度皆倣彼之昌平百年文墨日起一胡今千茲盛哉而里巷之爲讀書識字所有如當其未聞之者則吾黨蝸蘭學是也蓋於地之圖載數百之国不隆凡人區吾

第七號

訓蒙画解集（序文）

（同　前）

瞻蒙画譜集

（文）

（同　前）

開合其相交用以製字躰。字之所不及画以晓之。画之所不通字以辨之。各国又有其比聖人道德之師以布教導。其言与支那雖異其意則供与支那同其旨故寓言譬喩亦復倣之云以為序。

文化甲戌秋七月

東都　挑言司馬峻識

第八號

訓蒙画解集

（正編第一圖）

（前　　同）

臨蓐画職録

（五圖巻一圖）

（同　前）

（前　　同）

訓蒙画解集　（附錄第二十三圖）

隣家画賛

（同　館）

（同繪巻二十三圖）

（同　　前）

訓蒙画解集　（正編第二十九圖）

第一〇號

嬉笑画譜集　（五編巻二十式図）

（同　前）

戰国策云

楚人有兩壽者人龍。其老者長者曰言之。龍其少者許之。居多歲何有兩壽者死。客謂龍者曰。汝取長者乎。少者乎。曰取老者。客曰長者曰言汝。少者和汝。汝何為取老者。曰居彼人之兩。則欲其許我也。今為我壽。則欲其曰言人也。

多ふ二人壽ある者有て
ある人男女三龍ひよ若き女
同心〳〵年ふけふる女
同心せざ〳〵て言り怨ん
其後迄なく兩壽
ある男死を多ふ
一人の女と壽せんと
をふ同心せざる言ふる女と
壽をひかえふいかんとなれば我壽となりて
も他の男に同心せざるとと言ふ敵の臣下よ我
と同道せんとふ者あり我臣となりて亦他に
門道せんると思ふと是実なき者なるべや

第一一號

訓蒙画解集

（正編第九十一圖）

（同　前）

臨蒙画報　第

（五編第六十一圖）

（同　館）

（前　　同）

訓蒙画解集　（正編第十六圖）

第一二號

隨筆畫報　第

（五編第十六圖）

（同　館）

第一三號

天地理譚（序文）

（原本、寫本美濃半截）

天地理譚

歐羅巴一大州中在蝸蘭國五十度外而隣于冰海夜國故恒物産之其大王造製大船以渡海萬邦洋外不見山嶽故駕船舵術者天以為驗符標的故學天象測地位其術算曆定節氣是所以為交易富國之務也彼土西域與吾地其隔遐矣頃吾黨之者兩三通蝸蘭之辭為彼國之李予竊顚其門誌去思萬國吾日本未見聞且無支那之書吁此学不開於吾國後壯必俊傑並出究之又極方今啻此學知者鮮以支那之文字者萬國不知之西洋之文字者支那

天地理譚（序文）

第一四號

（同　　前）

不知之耳此学詳之以須知天度日月五星順逆其
真理須知輿地全形及山川風土萬物之異狀斯是
泰西氏之學也

文化丙子初夏　桃言司馬峻識

天　地　聖　賢

（詩　文）

（同　館）

（前　　同）

天　地　理　論　（二丁ノ裏）

第一五號

天地理譚　（一ヶ丶喪）

東都　桃言司馬峻著

天地之理

夫天トハ仰見ル青天ヲ云此青キハ氣ノ積リテ青キヲ成ス水渕ニ沮テ底深キ處水色青キカ如シ天ノ遠キ丁限ナシ形ナク只象トスルモノハ星ノ竺ヲ以テス二十八宿一年ニ一周回スルヲ知ノミ大地ハ圓ナリ往古ノ人之ヲ三稜トス而後四隅トシ然ニ西洋人大地ヲ一周回メ之ヲ知ル大地ハ天ノ中間ニ係（カヽ）テ墜ス傾ス四面皆國ア

（原本、木版半紙判）

地球全圖略說　（二丁ノ表）

第一六號

地球全圖略說

東都 [illegible]

[illegible]

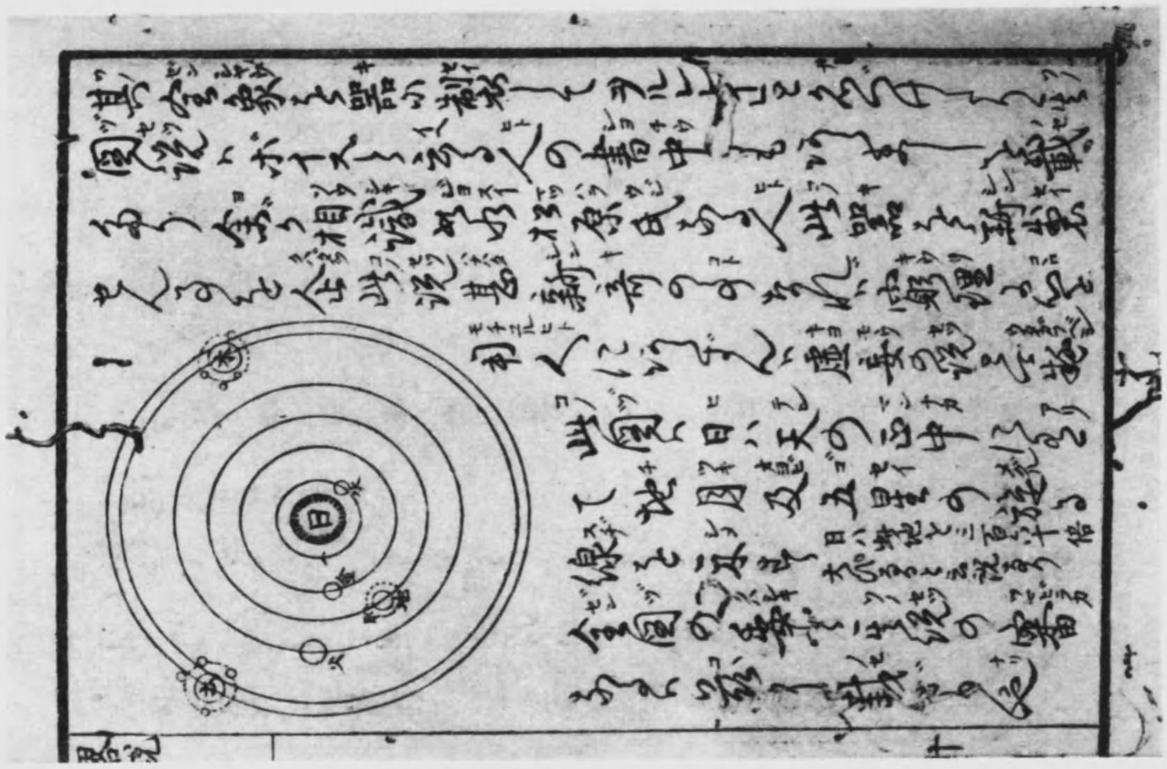
余繪事の餘暇和蘭船に來りしこゝろの奇器畫圖の類を摹製せる嘗彼邦銅版のはじめを考索し已に諸圖を新製して人に示す造法を吹て萬國の圖を出せんこゝろ彼西刻の圖を淳て是を摸寫し銅版刻を須其圖なるもの從來我國の人多ハ輿地總界なるものを知者すくなく冀ハ人

（原本ノ本頁中缺ル）

（同　　續）

地球全圖略說　（十十八號）

地球圓全論 （十ノ巻）



（圖　説）

（原本銅版彩畫例）

地轉儀略圖解　（表　紙）

第一八號

地轉儀略圖解（裏　表）

（同　　前）

地轉儀略圖解　（表紙裏）

第一九號

地轉儀略圖解

東都春波樓藏版

一外ノ大環ハ和蘭ノ法ニシテ晝夜二十四時分ッテ百二十刻トス其次三百六十度ヲ刻シ周天トノ彼國三十度ゴトニ一宮ヲ置テ則十二宮トス是ニ配シテ二十八宿ヲ配シ又土木火ノ三星ヲ列子是ヲ上ノ惑星ト名ヅク其次ハ吾地球ニ一晝一夜ニ一旋轉シ天ノ一度ヲ進ム月ハ地球ヲ中心トシ一日ニ十三度ヲ行ク圖中ノ真心ハ日輪ニ其外環ハ水星天トス又一層ノ環ハ金星天トス半年ハ西ニ現ハレ半年ハ東ニ現ハレノ形ヲナス水星日輪近ニ此二星ヲ下星ト名ヅク

世間ニ地球ト天ヲ窺ント欲セバ晴天ニ夜ニ當リ見レバ則日輪柳星ノ間ニアリ地球日本ノ処ヲ昏ノ所ニメグラレ則初昏西方ヨリ氐房心尾箕斗ノ堅ム又地球旋轉ノ夜半ニ至レバ牛女虛危室壁ガ如レ然シテ次ニ五星ノ躔度ハ日月ノ曆ヲ求ヲ見ベシ又土木火ノ順逆ハ土木ヲクレル者疾ク進ミ火星疾行モ遲ク行ノ見ベシ是皆地球運轉スル故ニ然ルニ皆右旋ノ說ヲ右ヨリ左リエメグラスハレ

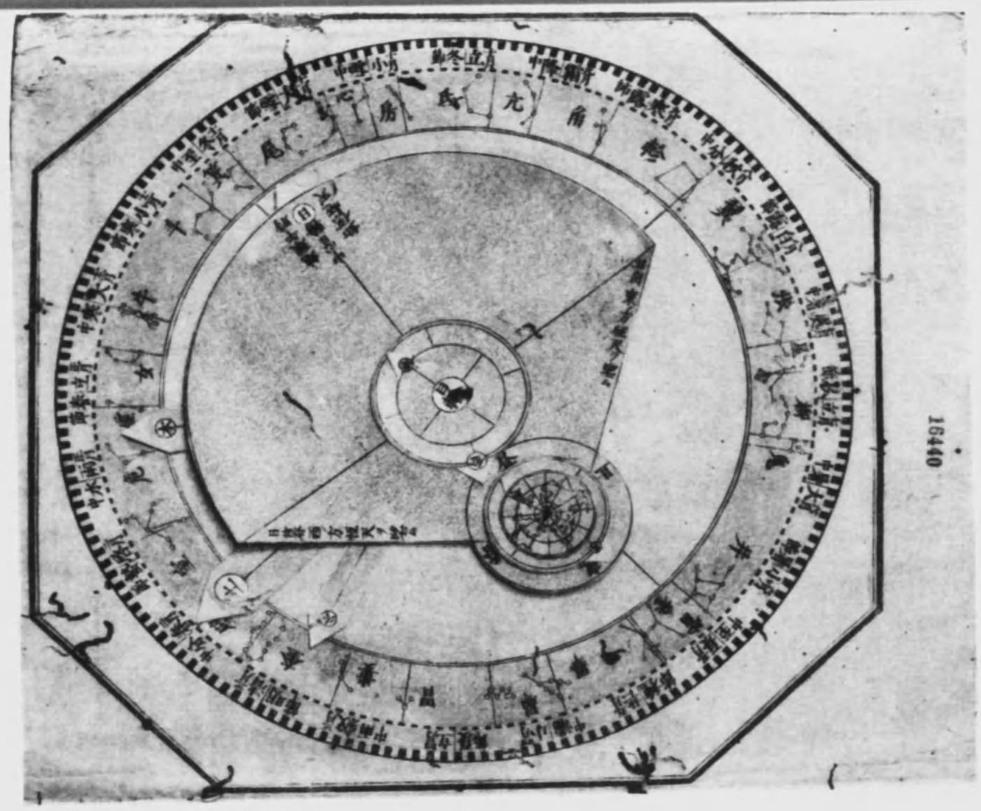
（前　同）

第二〇號

地轉儀略圖解　（本文）

地球經緯圖說（本文）

（圖 省）



16440

第二一號

刻白爾天文圖解（表　紙）

（原本、木版美濃判）

陳白爾天文圖解 （表 裏）

（凱本·木版美麗印）

第二二號

刻白爾天文圖解

（凡例一丁ノ表）

（同　前）

（同　前）

凡例

一此編ノ全説ハ西洋ノ書ニシテ歸ニ崎陽ノ譯司本木氏翻譯スル者ニシテ余請テ之ヲ閲スルニ刻由爾ノ窺理地轉ノ説ヽ悉ク符合ノ文字ヲ以テ圖解スト雖ドモ解得ガタシ爰ニ於テ積年虚ク勞ス頃ロ其原本ヲ得テ稍ヤク片端ヲ披ケリ然レ𪜈天儀ヲ製造シ以テ天度ヲ測量セザレバ了解シタリトハ言ガタシ故ニ晋地轉ノ窺理地轉儀略圖解ヲ造製シテ日月五星ノ高低ヲ圖シ此説ヲ疑フ

（前　同）

刻白爾天文圖解　（天ノ七ノ裏）

陳白鼎天文圖說　（天一堂）

第二十七圖
人談話ス
人ノ呼氣ハ吾吸氣ニ是レヲ淡水ト名ヅク
第二十八圖
氣剛ニシテ人其ツヨキヲ知ラズ魚ハ人ニ聲ヲ水ハ氣ニタトフ
第三十圖
水ヲ噴テ虹ノ象チヲ見ル
日光映ジテ五彩ヲナス

第二四號

和蘭通舶

（卷一六丁ノ裏）

（原本、木刄美濃刄）

ンコトヲ思フ者アレバ即大舶ヲ造製シテ之ニ与エ或ハ未珍マザル物ヲ始メテ製作スル者ニハ王コレニ金銀ヲ与エ之ヲ製セシム

○歐羅巴諸國皆文學ヲ尚ミ國王一國一郡ニ學校ヲ設ケ數千人ノ内ニ優ル者ヲ試ミ之ヲ師トス歐羅巴諸洲ノ學ハ窮理格物ニシテ第一天文性理ヲ究メ各人ノ好ミ長ズル者ヲ擧テ其官ニ進ム其國内悉ク鰥寡孤獨ノ者ヲ養フ院アリ其名ヲ「ガ

第二五號

和蘭天說

（凡例二丁ノ表）

（原本、木版美濃判）

此國ノ假名ノ如シ其一二ヲ左ニ誌ス人生テ三歳ニメ父母ト言長スル稚音ヲ學ヒ得タル者ナシ天地ト云文字ハ不學ノ知者ナシ和漢トモニ文字ノ邦ニメ文字ヲ不學ノ書籍ハ不讀経典ト雖其理ニ通ツルヿ不能然ニ此日本ハ元來訓ノ邦ニメ慎ニ語スル所ノ雜話皆訓ニテ文字ニ不當ルヿ多シ西域ノ諸州文字ナニ唯訓語ヲ為テ通用ス故ニ先書ヲ素讀シ而後ニ師ニ其意ヲ聞テ理ニ通ゼントスルハ迂遠ナラスヤ彼國音ヲ以テ通スルニ天理地理ニ通曉ゼント欲セハ其書ヲ視テ日本ノ假名ヲ讀ガコトシ嘗テ雜言俗語ノ差別ナシ故ニ師ナクメ天地ノ理ニモ通スル也其簡辨カクノコトシ

朝鮮文字	韃靼文字	天竺文字	西洋文字（フランダ地方）
로 ㅎ 야	𐲀 𐲁 𐲂	आ इ द ए ग व ई म	A.B.C.D.E.F.G.
태 ㄴ ㅌ	𐲃 𐲄 𐲅	का गि सा जे आ मि	H.I.K.L.M.N.
놀 ㅍ 아	𐲆 𐲇 𐲈	श्री ल ओ ल ग ३	O.P.Q.R.S.T.U.
			V.W.X.Y.Z.

鞨鮮漢字ヲ用ユト。亦彼國ノ俗語アリト雖。此者日本ノ假名ノコトシ

西洋諸國ノ文字ハ皆左ノ方ヨリ右ノ方（横ニ連テ是ヲ右トス

はしがき

司馬江漢は徳川文化が生んだ一奇才として、ひとり繪畫のみならず、種々の方面から、研究に價する人物である。こゝに、彼が晩年の遺稿の天地理談を紹介するのも、江漢研究の爲に、一新資料を提供するにほかならぬ。附錄として添へた論文と年譜と、ともに未熟不完全のものながら、彼について、些かにても闡明し得たところあらば幸ひである。

大正五年予が陸軍士官學校奉職當時、偶然同校の文庫に見出て筆寫し、同好の知友の間の語り草とした江漢西遊日記は、一二傳寫もされて好事者の注意を惹いたが、數年前、某々氏等によつて刊行されて、世に流布するに至つた。このたびまた、この天地理

談を、はからずも東京一書肆の店頭に求め得て、公けにするに當り、江漢に對する因緣の奇しきを思はざるを得ない。

終りに本書を著すに當り、天地理譚及び訓蒙画解集の借覽や撮影を許されたことについて、九州帝國大學工學部と帝國圖書館とに、また、他の江漢の著書を利用するを得たことについて、神戸商業大學附屬圖書館、東北帝國大學附屬圖書館及び同僚山田孝雄教授に、謝意を表する。

昭和五年四月二十日

仙臺にて

村岡典嗣

目次

天地理談解說……一―一三
天地理談　乾……一―七四
天地理談　坤……七五―一四六
附錄第一　市井の哲人司馬江漢……一―六七
附錄第二　司馬江漢年譜……六九―九一

圖版目次

司馬江漢自畫像　第一號（刻白爾天文圖解所載）　帝國圖書館所藏
天地理談　自第二號至第五號　九州帝國大學工學部所藏
訓蒙画解集　自第六號至第一二號　東北帝國大學附屬圖書館所藏
天地理譚　自第一三號至第一五號　同上
地毬全圖略說　自第一六號至第一七號　同上
地轉儀略圖解　自第一八號至第二〇號　同上
刻白爾天文圖解　自第二一號至第二三號　同上
和蘭通舶　第二四號　同上
和蘭天說　第二五號　山田孝雄氏所藏

天地理談解說

こゝに公けにする天地理談（一名無言道人筆記）は、司馬江漢の著作で、自筆草稿のまゝ遺され、從來未だ、學界に知られなかつたものである。本書は隨筆といふべきものであるが、標題の示す如く、各章概ね、作者が人生、世界に對する所感や思想を托したもので、その多くの部分を占める、漢籍その他から抄錄し解說せる寓話諭言のたぐひもまた、同樣である。而して、本書の著作年月は明記されてをらぬが、編中に徵して、ほゞ之を推定し得る。卽ち所見の年月を摘出すると、文化十癸酉年にかゝるもの四箇所、その前年文化九壬申年にかゝるもの三箇所ある。十年には冬十二

月のものあり、更に一箇所、文化戊三月十六日の記載がある。これらによつて、本書が江漢が七十六七歳の交の著であり、正しく彼が晩年の心境を伺ふべき一資料たることは、確實である。而してその摘錄せる寓話諭言の出典について見ると、春秋、左傳、孟子、戰國策、荀子、楊子、陸買新語、老子、列子、莊子、抱朴子、管子、韓非子、淮南子、郁離子、離騷、文選、世說新語、揮麈新談等があり、ほかに法華經、殊にまた伊曾保物語がある。又書中に見えた江漢の知己、その他當時の人物にして注意すべきものとしては、脇坂淡路守(寺社奉行)、山領主馬(肥前佐賀藩士)、圓然居士(片山松齋)、海保義平(青陵)等がある。

本書に對しては、江漢の他の著書中、多少の關係の認められるものが數種ある。

第一には、既に公刊され流布せる春波樓筆記である。筆記は江漢の主著の一つで、本書と同型の隨筆であるが、その成れるは、思ふに文化九年の頃で、本書より二年ほど先立つべく、書中の記事亦、文化七年、八年の交のものが多い。量に於いても本書よりもはるかに豐かであり、又一層整へられてもゐるが、之を本書と比較すると、記載中に相關係し、又相共通するものが、多少存する。例へば筆記第三條の加藤庄次郎の事が、理談に、後日談的に記されたる(一三二頁參照)、筆記第四條の「狐狸の輪奈かけて」の歌と說明とが、第十條の「活者は水で包んで」の歌と共に、理談にいでたる(三頁、四三頁參照)、又梁鍠の傀儡詩が、筆記には譯文で、理談には原文で載せられた(七九頁參照)等である。なほ伊曾保物語については、筆記には「原本紀州侯にあり。皆譬を以て敎を設く、爰に

一二章を掲ぐ」として、鶴と狼との話、猿と人との話、鳥人に敎化をする話の三つを載せたが、これらは理談にもあり、漢文體の本文に、假字交り文の解意が附されてゐる(三〇頁、三一頁、三五頁參照)。而して理談が、諸書より抄錄せる寓話諭言を主たる內容とせるに比して、筆記は概ね、著者自らの記述である。

第二に、江漢が文化十癸酉年七十六歲の八月に知友に配つた、「七十六翁司馬無言辭世ノ話」と末記した自畫像入のちらし(黑田源次氏「司馬江漢西遊日記について」參照)があるが、その後半に、

一、萬物生死を同して無物に復歸る者は、暫く聚るの形ちなり。萬物と共に盡ずして、卓然として朽ちざるものは、後世の名なり。然りと雖、名千載を不過。夫天地は無始に起り無終に至る。人小にして天大なり。萬歲を以て一瞬の如し。小慮なる哉。嗚呼。

とある一節は、理談の乾坤二卷に、それ〴〵いでた。ともに、「後世の名なり」まで原文の漢文で、その後を乾には同じく漢文で、坤には假字交り文で記したが、文句はこのちらしと大同小異である。たゞちらしの文化癸酉秋八月が、同七月となつてゐる(五五頁及び七五頁參照)。而してこの「辭世ノ語」を配つたことについては、理談中にも「八月鎌倉圓覺寺に於て死たる事板行にして、知己へ皆知らせけるに」との記述がある(二八頁參照)。

第三に、江漢が文化十一年秋の著に、訓蒙画解集一卷のあることは、大槻如電氏の新撰洋學年表によつて、かねて知つたが、このたび同書を帝國圖書館に探り得て、本書との間に存する興味ある關係を明らかにすることが出來た。画解集の如何なるものかは、

洋學年表にも抄記された同書「序文の譯言」の一節、「彼國の語にシンネヘールと云ッて、譬を以て敎へとす。聖人道德經と同じ。故に今爰に、古人の遺言數十話、小子竊に數言を後に附錄して、下に畫をなし、傍に國字を以解し、題して訓蒙画解集とし、童蒙の眠を覺んとて、之に云ッのみ」とある如くであるが、之を原本について見ると、所謂「古人の遺言數十話、不子竊に附錄せる數言」といふものは、殆んど凡て、理談記載のものと一致し――彼此出入するもの數編あるが――字句また、ほゞ大同である。その小異と前述の出入とは、相對比して、互ひに補ひ得るものがある。而して年表には、「正編九十三圖、附錄二十五圖、其故事遺言は、大率支那古書に採て、一も西洋話說に及ばず。或は例の切支丹邪宗を避けし者歟」とあるが、こはやゝ精しくなく、伊曾保物語に由來せるも

の、少くも二編が、附錄中にある。鶴と狼との話、狙と人との話等がそれで、ともに理談にもいでたが、たゞ後者にある小鳥人を敎ふる話は、画解集にはない。又自作のものの數編いでたことも、理談と同樣である。而して、本書が總じて伊曾保物語を學んで作られたものであることは、明らかである。(なほ本書は、吾人の數へたところでは、序文五枚、本文六十四枚で、本文は四十七枚、九十二圖を含む正編と、十七枚二十五圖を含む附錄とより成る)。

いま兩書の比較に資する爲に、まづ画解集卷頭の一節を揭げ、次に附錄全編の目を、冒頭の一句によつて擧げよう。正編第一圖の解に曰く(圖版第八號參照)、

後漢書朱浮傳云。

遼東有豕。生子白頭。異而獻之。行至河東。見群豕皆白。

懐(イタヒ)慙(レ)而還。

遼とうと云處に、豕にあたまの白きがある。是は珍しきと思ひ、上へけんじて、又河東と云所へいて見れば、頭の白きはいくらもある也。人壯年なれば、未ダ見ぬ物聞ぬ事多し。自分に目づらしく思へば、人もめづらしからんともてはやす。

と。本書の之に當る箇所と比較して、その異同を知り得る(七八頁參照)。次に、附錄の諸項を擧げると。

蜈與虵相向謂曰。先生無足。云々(一)

都會之大道。東轉迂曲。有小街路。云々(二)

有人云。有大志者。仰望上必不可視下。云々(三)

蛙對蟹云。云々(四)

鴉(カラス)謂鷲(ウ)鷲曰。云々(五)

有刻假面者。云々(六)

虎囓諸獸而至狐。云々(七)

輪扁斲車。云々(八)

在少潴(タマリミヅ)自生虫。云々(九)

匱(フルドウグヤ)董鋪。表飾諸物而賣。云々(十)

蛞蝓(ナメクジ)向蝸牛(クワギウ)云。云々(十一)

人來云。于市見狐於衆中。云々(十二)

狐語狸曰。云々(十三)

犲狼喰人。咽喉有骨。云々(十四)

一產三虎生。云々(十五)

犲狼欲喰人。云々(十六)

販食店(ニウリミセ)。云々(十七)
有人而畜小鳥。云々(十八)
蚊集而語。云々(十九)
孑孑(ボウフリ)虫游于天龍水。云々(二十)
連日大雨頻也。云々(二十一)
山中鄙。人出都會之地。云々(二十二)
群狙中有爲長者。能舞。云々(二十三)
蛄(ケムシ)化成蝶。云々(二十四)
雞對孔雀曰。云々(二十五)

二十五編中、最初の三編等を除いては、他は凡て理談にもいでてゐる。理談にあつて画解集に缺けたもの、また前述の小鳥と人との話の如き、數編ある。專ら漢籍に出典を有する正編の場合も、

ほゞ之に準じて、知り得る。

なほ、帝國圖書館所藏の画解集は、正しく江漢の自畫自筆であることを認め得た(圖版自第六號至第一二號參照)。

第四に、これも新撰洋學年表文化十三年の條に、

四月　天地理譯　司馬江漢撰　九州工科大學所藏

とあり、天地理譯が、索引には天地理解となつてゐる。九州帝國大學所藏の原本を借覽したが、書名は理解、理譯ともに誤りで、實に天地理譚とある。卷頭「文化丙子初夏　桃言司馬峻識」と末記した漢文の序がある。この書は、天地理談とは全然別な、窮理に關する圖入りの書で、天地之理、氣之論、磁石之理以下、天地窮妙之說、氣船之說にいたる、凡て六十三項を含む。九州帝國大學本は、やゝ後代の寫本であるが、未だ他に異本の存在を知らぬ。こ

の書は、實に、江漢が最後の著述と言へる(圖版自第一三號至第一五號參照)。

以上看來つたところによつて自ら明らかなのは、天地理談が、江漢晩年の著述中に於ける位地である。要するに理談は、春波樓筆記の後に來り、而して訓蒙画解集に先立つもので、隨筆として筆記を補足するものであるとともに、寓話諭言が全書の大半を占めた點に、特色を存する。しかもそれらの寓話諭言のたぐひが、獨立してまとめられ、畫圖を添へられて成つたのが、實に画解集である。

次に本書印刷上の用意について一言する。

本書は、江漢晩年の老筆にかゝり、誤脱をはじめ、文字遣ひ、假字遣ひの不妥當又は引用文句の粗雜等に、訂正を必要とするものの頗る多いが、今は專ら、原本のすがたを傳へようとの目的から、それらも殆んどもとのまゝとした。たゞ誤字の活字にないやうなものは、之を改め記した。又變體假字は、之を普通のに代へた。句讀は原本には概ねないが、今之を附し、濁音符もまた同樣之を附した。原本は乾坤二卷より成り。九行約十七字詰で、乾四十九枚、坤五十枚、合計九十九枚の半紙本であるが。今は字詰を增したために枚數をやゝ減じた。乾坤兩卷に於ける重複また少くないが、これまた、そのまゝとして、削除を試みなかつた(圖版自第二號至第五號參照)。

天地理談

乾

無言道人筆記

○或時盲人ニ問。夢ハ視ルヤ。答云。路ヲ迷ヒ或ハ犬ニ追レ、溝堀ヘヲチイル事ノミ。目ニ見ルノ夢ナシ。何トゾ目ニ視ルノ夢ヲ見タシト云。亦問。五彩ノ色ヲ知ヤ否ヤ。不知。五彩ハ色ト云物ノ名ニシテ、之ヲ譬ヘテ云バ、辛(カラキ)ハ赤キ色、鹹(シヨカラ)キハ青色、甘(アマキ)ハ白色、酢(ス)ハ黄色、苦ハ黑色、亦五音ノ如シ。

○吾日本、天下御議定ト云法アリ。脇坂侯數年寺社奉行、亦對馬ヘ使ヘス。其功廣大也。然共今ニ寺社奉行タリ。脇坂ノ家ハ、柳ノ間ニテ外樣大(ダイ)名

ニテ普代家ニ非ズ。故ニ如此。亦譬ヘテ云、聖天ヲ祭ル者アリ。聖天ノ像ト供物ト同ク油ニ入、火ヲ以焚ク。其法祕法ニシテ僧徒之ヲ行フ。甚ダ怪シキ術ノ如キ者ニテ、其法ヲ修ルニ、金七兩二分ヲ出ス。之ヲ行ヘバ忽チ福ヲ得ル。實ニ奇々怪々ト云フベシ。然シ古ヘヨリ弘法大師ヨリ傳ヘ來テ今ニ行フト雖怪トセヅ。其餘摩利支天、不動、藍染明王、異形ト雖聖天ノ如シ。梵字ト蘭字ハ同ジヨウナレ共、蘭字ハ板行ニナラズ。誠ノ正法ト雖、新規ノ說ヲ云時ハ天下御用ヒ無之。此處ヲ能

ク考知ルベシ。

○人產レテ小兒ヨリ小童ニ至ニ、人ヲ不臆(ヲク)者アリ。是ハ常人ノ才ナリ。甚ダ臆(ヲク)スル者アリ。愚ノ如シ。必ズ生質薄弱ニシテ生長シガタシ。此者長ナルニ及ンデハ、良智良能ノ人トナルベシ。小兒ヲ視ル鑒、大概顏色ニアリ。

○世の中ハ狐たぬきが輪奈かけて

智慧の餌にて馬鹿(バカ)をつるなり

世に狐と云けだものハ、人ニ取付たり、亦ハ色々に化る事を爲(スル)ハ、人と雖モ一向ニ出來ず。夫故に狐

を稲荷ジヤと心得テ居る人多し。又狐の方ニテハ、人ハ奇妙なる者ニテ、坊主に化たり、侍に化たり、商人に化たり、儒者神主ニ化たり、種々様々に化るけれど、其中ニ愚なヤツハ化様が下手なり。利口なヤツハ智慧と云餌を以、大名ヤラ金持を化して、己卑賤なりと雖、忽ち大福人となりてうまゐ物を喰ひ、此苦の世界を、心持能く一生涯暮す事ニて、啻此餌の掛ケよふニて、馬鹿な人間ハいくらも輪奈ニかゝるなり。たとえバ小判を餌とすれバ、慾の深ヒ者が掛る。盃を以テすれバ、酒好がかゝる。

女を出して置バ、老若智あるも愚も一度にかゝるなり。

○智慧の餌ニて人を釣なり。

狐狸の曰、鼠の油揚の芳が鼻の穴へ入ると、喰ひたくてこらへる事ならず。あれを喰へバ命を失ふ事を知りながら、何分にも喰ひたいと思ふハ、畜生のあさましさ也。然ども人間の好く物を以餌とするならバ、人もつられそふな者ジヤと云て、小判を餌ニすれバ慾の深ヒ者ハ一足飛ビに金持になる氣で、竟盗人ニなりて首が無なる。盃を餌とす

れバ、酒好（ズキ）な者ハ、一寸一盃か二盃、三盃後にハかぎりを不知。竟ニハ身を亡すにいたる。又女子の美なるを餌とすれバ、老若愚（ヲロカ）も智あるも、皆首をくくる。

○肥前佐賀山領主馬と云人ハ、江戸八年在番して、去年早春ニ國へ返りぬ。予と友トメ善。此頃書狀ヲ來ル。其文中に、

爰に一つの珍事あり。爲御慰左ニ書載ス。去文化九壬申の六月廿七日の事にて、野生住居仕ゐ屋しきに、狹きから堀有之。園中を見まわり居ゐ處

に、右のから堀に大キなる蛙居ゐて、向フを見つめ申ゐ。其處を見申ゐ得バ、シガラミノ間より一尺七八寸の蛇首ヲ二三寸出し、彼蛙とあらそう樣子、夫故木根に腰をかけ見申ニ、處半時ばかり過て、蛇ハのがれんとして、少シ首をそむけんとする處を、蛙飛かゝツて蛇の首を呑ミ申ゐ。ヤガて五六寸呑レても、蛇ハのがれんとして、尾ハシガラミの竹ニ卷付、引合申ゐてロヨリ一寸位出でゐ處ハ、朱の如くあかし。段々と一尺程呑込ミゐ時、蛇の勢（セイ）よわり尾のミびく〳〵と動き申ゐ。野生方ニも少

々普請いたしゐ故、大工日雇ども數人參て見申ゐ間、蛙から堀より道の廣き處へ出ゐ故、能ク見得申ゐ。竟に不殘呑込ミ申ゐ。八ツ半時ヨリ夕暮れ近くニ相成申ゐ。蛙四寸程後ハ菊畠ノ處にはい入ゐ。翌朝參ゐて見申ゐに、何方へか參ゐて不居。

范睢脫厠報仇

○周ノ赧王四十五年ノ比ニ當テ、魏人范睢、字ハ叔ト云者アリ。魏ノ大梁ノ人ニシテ、素ヨリ經濟ノ大才ヲ懷テ、六國咸辨士ト稱ス。諸子百家皆能ク其妙ヲ究、六韜三畧、其精事ヲ得ズト云事ナシ。嘗

魏王ニツカヱント欲スレ共、身貧シテ其意ヲ得ズ。因テ魏ノ中太夫須賈ニ事テ、門下ノ客タリ。時ニ姓ハ魏、名ハ齊ト云者アリ。是魏國ノ丞相トメ、檀ニ朝政ヲ專ニシ、兵權ヲ掌ニ握テ、一日探子來テ秦王穰侯ヲ都督トシ、白起ヲ先鋒トシテ、親ラ大軍大勢ヲ率テ上方ノ谷口ニ屯ス。未ダ何レノ處ニ向ト云事ヲ不知ト報ズ。魏齊大ニ驚テ曰、秦國每ニ六國ヲ並ントス。今兵ヲ谷口ニ屯スル事、魏ヲ伐ントノ意ナルベシ。吾國兵微ニ、將寡シ。其上秦ハ吾ガ隣國タリ。倘シ師サヲ興シ境ヲ犯事アラ

バ、吾ガ國必ズ保ガタカラン。如シ好ミヲ結救ヲ求テ、無事ヲエンニハトテ、中太夫須賈ニ謀テ曰、當時秦國其强勢ニ倚リ、天子ヲ挾ミテ以テ諸侯ニ令シ、動(ヤヽ)スレバ百萬師ヲ以、吾ガ魏國勢弱シテ敵對ガタシ。今子ヲ以使トメ齊ニ遣シ、金帛ヲ齊王ニ獻ジ、夫ト共ニ好ミヲ結ビ血ヲ歃(スヽ)リ、盟ヲ定テ、凡急難アラバ互ニ相救ン事ヲ以セン。須賈ガ曰、君ノ祿ヲ食テ君ニ事ニ終ン事、臣敢テ辭セン。但臣才微ニ智短ク、恐クハ王命ヲ辱メテ、丞相ノ托スル處ニ負ン。今一人ノ謀士ヲ得テ、臣ニ行ン事可ナルベ

シ。魏齊ガ曰、然バ足下其人ヲ擇メ。須賈ガ曰、吾ガ門下ノ客ニ范雎ト云者アリ。武文ノ才ヲ兼、廟廊ノ器タリ。必ズ能ク四方ニ使シテ、君命ヲ辱メジ。魏齊則范雎ヲ召テ謂テ曰、汝須賈ガ門下ニ處シテ、未ダ其能ヲ不見ト雖、須賈汝ガ全才ヲ稱ス。吾ニ敎テ汝ヲ輔行トシ、好(ヨシミ)ヲ齊國ニ通テ、秦ノ兵ヲ抗(フセガ)ン事ヲ以ス。汝コレヲ能スル事ヲエバ、魏王ニ奏シテ重ク用ベシ。范雎ガ曰、鯫(セウ)生(セイ)才劣ニシテ敢テ職ニ當ジ。魏齊ガ曰、須太夫子ヲ荐(スヽム)ル事錯(アヤマ)ラジ。子ソレ辭スル事莫レトテ、次ノ日魏王ニ奏シ、須賈

ニ命ジテ正使トシ、范雎ヲ副使トシテ、金百斤、白璧十双、車馬十乗ヲ以テ齊王ニ獻ゼシム。二人命ヲ領シテ即日行裝ヲ整、車馬ヲ馳ルニ、日アラズシテ齊國ニ至ル。魏國ノ使至リト報ゼシム。齊王即チ召入、二人拜舞已ニ畢テ、金璧ヲ獻ズ。齊王ノ曰、卿等遠ク來テ跋渉ヲ勞ス。千里ノ貢獻何ナル諭カアル。須賈ガ曰、當時天下ヲ一統ニ非ス。地七雄ニ裂テ、小國ハ大國ノ爲ニ併セラル。今金璧ヲ獻ジテ、進質ノ薄禮ヲナス。願ハ大王血ヲ歃、誓ヲ立テ、永ク好ミヲナシ、倘秦一日釁事ヲ生ゼバ、互ニ

相救援ン事ヲ許玉ハバ、臣等世沒ルマデ德ヲ感ゼン。齊王ノ曰、爾ガ魏、何等ノ主ニシテカ誓盟ノ言ヲ以、寡人ガ前ニ陳ルヤ。范雎ガ對スル事ノ遲キヲ見テ、進ミ出テ曰、臣ガ主ハ仁義禮智雄畧ノ主ナリ。齊王大ニ笑フ。范雎が曰、階下何ヲカ笑玉フヤ。齊王ノ曰、卿自讃スル事過タルヲ笑。范雎ガ曰、然バ臣一々是ヲ奏セン。齊王ノ曰、卿ガ言朕ガ心ニ合バ、則チ誓ヲ立ン。范雎ガ曰、吾ガ王、嘗テ無忌ヲ信陵ニ封ズルニハ仁ナリ。凡ソ政事皆宜ニ合フハ義也。能身ヲ階下ニ屈スルハ禮ナリ。魏

ノ先王辱(ヅカシメ)ヲ受タルニ、今仇ヲ忘レテ意ヲ致スハ智ナリ。數州ニ據有(ダモツ)テ、虎ノ如ニ四方ヲ視ハ雄ナリ。策(カリ)ヲ以テ六國ニ交ハ畧ナリ。爰ヲ以之ヲ論ズレバ、仁義禮智雄畧ノ主ニ非ヤ。齊王又問テ曰、魏王頗學ヲ好ヤ。范睢ガ曰、魏王賢ヲ用能ヲ使テ、志經畧ヲ存シ、餘閑アル時ハ、博書史覽ルト雖モ、然モ書生ニ效ハズシテ、章ヲ尋句ヲ摘ノミ。齊王曰、魏ヲ伐ハ如何ン。范睢ガ曰、大國征伐ノ兵アレバ小國モ亦之ヲ禦グノ備アリ。齊王ノ曰、魏國保ガタカランカ。范睢ガ曰、帶甲百萬ヲ養テ江漢ノ地トス。

何ノ難事カアラン。齊王ノ曰、魏ニ太夫ガ如キ者幾人カ在。范睢ガ曰、聰明特達ノ者八九十人。范睢ガ如キノ輩、車ニ載斗ニ量ヒ勝(アゲ)テ數フ不可。齊王嘆ジテ曰、四方ニ使シテ君命ヲ辱メザルヲ士ト謂ツベシ。誠ニ范睢ガ如キハ、其君ヲ辱シメザルナリ。況其言法ルベク、井々トノ條理アルヲヤ。汝諸ノ文武、耳ヲ側テ聽ケ。道理ニ合リ。張儀蘇秦再ビ出ルト云ヒ、亦コレニ過ジ。是ニ於テ光祿寺ニ勅メ、宴筵ヲ排(ヒライ)テ、丞相段干朋ヲシテ、是ヲ欵待(モテナサ)シム。次ノ日。段干朋、范睢ガ威アリテ畏ベク、儀

アリテ象ルベキ見テ、之ト共ニ談論スル事、終日スレ𪜈不倦。況ンヤコレ、動止法ルベク、口懸河ノ耳ニ入ガゴトク、蜜ノ侵事漸々ニシテ甜ガ如クナルヲ。遂ニ正使須賈ヲサシノケ、單ニ范睢ヲ欵待。齊王又黄金一笏ヲ賜テ、賢ヲ好ムノ意ヲ表ス。時ニ須賈驛館ニ寓シ、齊王ノ范睢ニハ金酒ヲ賜リテ、吾ニハ不與見テ、大ニ妬疑ヲ生ジ、范睢ガ吾ガ國ノ密事ヲ以、段干朋ニ告ルナルベシト。遂ニ齊王ニ辭シ、先テ國ニ歸ル。范睢ハ更ニ其意ヲ不知。須賈國ニ歸リ、魏齊ニ告テ曰、范睢ハ國ヲ賣ノ臣ナリ。

吾ト共ニ使シテ、其金酒ヲ受、段干朋ト終日談論シ、魏國ノ密事ヲ以テ齊ニ訴フ。倘重テ齊國ヨリ兵ヲ興シテ國ヲ伐事アラバ、其根脚ヲ露サレテ、以敵ヲ防ガタカラン。是ヲ以、先告知ナリ。魏齊ガ曰、狼子野心ノ輩、國ノ大事ヲ誤リ、吾誓テコノ賊ヲ殺ン。須賈ガ曰、范睢丞相ニ罪セラレン事ヲ恐テ、敢テ國ニ歸ラジ。魏齊卽日人ヲ遣シ、范睢ヲ捉シムルニ、則縛來ル。魏齊怒テ曰、國ヲ衒ノ賊、爲何歸ル事ノ遲ヤ。范睢ガ曰、齊王重ク筵席ヲ設テ欵待、此故ニ遲歸レリ。魏齊ガ曰、其宴ン使ヲ待スルノ宴

ニハ非ジ。國ノ政ヲ賣ノ宴ンナラン。齊王既ニ重ク筵席ヲ挑(ヒラク)ニ、何ゾ正使ヲ欵待ズシテ、副使ノ爲ニスルヤ。吾今亦汝ヲ欵待サント。左右ヲシテ草ヲ剉雜(キザミマクエ)タル豆一盆ト、馬一匹トヲ引出サシメ、范睢ヲメノ馬トモニ之ト食メテ、後士卒(シソツ)ニ仰テ范睢ヲ打シムル事一百、皮裂肉綻(ホコロビ)血流テ堵ニ滿ル事半日。身體針ヲ容ノ處ナク、脅(カタボネ)ヲ折齒ヲ摺(トリヒシ)ギテコレヲ責レモ、范睢階下ニ伏テ更ニ言事ナク、遂ニ詐テ死タル狀ヲ爲。左右報テ曰、丞相暫ク怒ヲ息(ヤメ)玉ヘ。范睢已ニ死セリ。魏齊之ヲ視テ、鄭安平揚安ヲメ、范

睢ガ屍ヲ簀ニ卷ニメ厠ノ中ニ棄シメ、賓客ノ醉ル者、更ニ其上ニ溺ス。殊更ニ辱ル事、後ノ懲テ妄言スル者ナシ。鄭安平范睢ガ罪ナクメ刑事(ケイセラレシアワレン)怜デ、密ニ之ヲ窺ニ、死セザル事ヲ知テ、問フ。先生未死。范睢簀ノ中ヨリ云、太夫實ニ吾ヲ怜(アワレム)ヤ。願ハ、太夫我救ヘ。故ニ家ニ匿(カクシ)テ其性名ヲカエテ張祿ト云。諸人之ヲ知事ナシ。年ヲ歷(ヘ)テ或時、秦國ノ太夫王稽魏ノ國ニ使ス。范睢ガ死セシ事聞テ、左右ニ問フ。范睢何如ナル人ゾ。其時鄭安平魏齊ガ命ヲ受テ客館ニ來テ、王稽ニ告テ曰、范睢ガ爲人ヲ說ク。

先テ齊ニ使スルニ、睢ガ大才アルヲ知リテ、副使トシテ雖モ其之ヲ愛シ、黄金ヲ賜フ。正使須賈羞ヲ含ミ逃レ歸テ、魏齊ニ讒スルニ、國ノ密事ヲ齊王ニ告タリト。故ニ角刑セラレタリ、惜ベシト。王稽ガ曰、才智アルト雖此謀事ヲ失セリ。須賈ガ先テ歸ル事、必讒ニ遇事ヲ知ラン。安平ノ曰、我家ニ一人ノ客アリ。范睢ニ不。性ハ張名祿ト云者。大梁ノ人ニメ、大才アリ。倘荐用バ、必國ニ利アラン。然バ引テ相見シメヨ。安平、王稽ガ實ニ賢ヲ荐ムルノ心アルヲ見テ、范睢未死ヲ告テ、夜ニ入、ヒソカ

ニ范睢ヲ引テ、王稽ニ見シム。王稽范睢ニ謂テ曰、先生難ニ遇ル事吾ツゞサニ聞之。安平ガ家、足下身ヲ容ル處ニ非。爲ニ今之ヲ計ニ、吾ガ車ヲ以足下ヲ藏シ、城ヲ出ニ若ハナケン。然メ秦王ニ荐メテ臣トシテ、事ンニ、必ズ近キ幸ヲ得ベシ。范睢ガ曰、太夫ノ德ニ憑テ、顚沛ヲ脫離セン事ヲ悅ニ堪タリ。次ノ日、王稽魏王ニ辭シテ車ヲ安排シ、鞍馬ニ仗テ護送シテ城ヲ出ヅ。范睢車ノ内ニ藏レテ、從者輪ヲヲス。直ニ西路ヲ望テ往事數日ニメ、秦國ニ至ル。已咸陽ニ至時ニ、昭襄王位ニ卽テ文武ノ

群臣列座ス。王稽入テ秦王ニ奏ノ曰、臣魏國ニ使ス。一人ノ賢士ヲ得タリ。性ハ張、名祿ト云者也。先ニ須賈ガ讒ニ遭テ、魏齊ガタメニ笞レテ難ニ遭ノ事ヲツブサニ秦王ニ奏ス。爰ニ於テ大王、張祿ヲ召入テ問ニ、誠大才勇士、辨舌流ガ如シ。昭襄王大ニ悅テ曰、張祿高士、吾何ゾ得ル事ノ晩ヤト。則封テ客卿トシ、軍旅政道ヲ談論シテ、吾范雎ヲ得ル事、誠ニ魚ノ水ヲ得タル如シ。毎ニ昭襄王ニ說テ范雎ヲ丞相トシ、應城ニ封ジテ應侯トス。周ノ赧王四十五年。范雎既ニ秦ニ仕テ征伐ヲ專スル事

得テ、其名六國ニ揚ゲ、威諸侯ニ振フ。爰ニ至テ魏國其豪覇ヲ懼レ、中太夫須賈ヲシテ、金帛ヲ秦ニ貢ゼシム。須賈命ヲ奉テ不日ニ秦ニ至テ、咸陽ノ驛舍ニ寓ス。范雎コレヲ聞テ、喜テ須賈此ニ來レル事、死期至リトテ、弊タル衣ヲ著、須賈ガ驛舍ニ至ル。須賈范雎ヲ見テ大ニ驚テ曰、范叔固ニ恙ナシヤ。吾汝ヲ以、魏齊丞相ノタメニ打死タリト思ヒシニ、何トノカ爰ニアルヤ。范雎ガ曰、彼時吾屍ヲ河邊ニ棄ラレシニ、漁翁ノ情ニ依テ一命ヲ助リ得タリ。其後秦ニ至リ。須賈ガ曰、今范叔何ヲカスル。范

睢ガ曰、人ノ爲ニ庸賃トナル。適〻太夫此ニ來テ交聘スルト聞テ、特ニ來テ相訪ナリ。須賈意ニ衰ミ、飲食ヲ與。時ニ臘月ニ値テ寒氣人ニ逼ル。范睢詐テ戰慄(フルエル)ノ狀ヲ爲。須賈ガ曰、范叔衣薄シテ寒沍(コヤエル)事如此。吾ガ著スル處ノ者ハ新ニ厚キ衣ナリ、一領ヲ脫テ兄ニ與ヘ、寒ヲ遮シメン事如何ン。范睢ガ曰、太夫著スル處ノ者吾何ゾ當ン。須賈ガ曰、古ノ道、衣衫(エサン)整ラザルハ朋友ノ過ナリ。何ゾ吾ガ兄ノ寒(コヤエ)タルヲ見ニ忍ンヤトテ、卽一綈袍ヲ脫デ之ニ與フ。深ク賢契溫煖ノ德ヲ感ズ、吾何ヲ以カ之ニ

報ン。今太夫爰ニ使スル事何カン。須賈ガ曰、秦王、張祿ト云者ヲ用テ丞相タリ。前日戰書ヲ送テ、我ガ王城ヲ索ントス。因和ヲ請テ、魏王秘藏スル夜明珠六顆今四ヲ秦王ニ獻ジ、二顆ハ張祿丞相ニ贈ルガ爲ニ、爰ニ至ル。足下張君ヲ知レリヤ。范睢ガ曰、卽吾ガ主人ナリ。今太夫ノ爲ニ張君ニ見ヘシメン。須賈大ニ喜ビテ曰、吾ガ兄明日吾ヲ引テ丞相ニ見シメヨ。范睢ガ曰、コト速ニセン事可ナリ。今日太夫ノ爲、轡(クツハ)ヲ引テ相府ニ到ン。卽車ヲ御シテ行。丞相識ル者、恠ミ懼レ避テ匿ル。ス

デニ相府ノ門前ニ至テ、范雎須賈ニ謂曰、吾先張君ノ近臣ニ報ゼン。須賈侍立シテ候フ事久シ。范雎出來ラズ。門下ノ者ニ問フ。門吏云フ、鄉者ハ吾張君ナリ。須賈大ニ驚テ其欺ルヽ事ヲ知テ、卽帶ヲ解衣ヲ脫、膝行メ府內ニ入、罪ヲ謝ス。是ニ於、范雎帳帷ノ內ニ坐シ、左右ニ侍スル者甚衆シ。須賈ヲ讓テ曰、義ヲ絕スルノ逆賊禽獸ニ劣リ、吾今德ヲ以テ怨ヲ報ゼン。汝ガ吾ヲ讒テ非刑ノ苦ミヲ受シメタルニハ似ズ。今隣國ノ使來レルアリ。欵待ニ禮ヲ厚シ、ソレト共ニ國ニ歸ラシムベシ。

且汝ヲシテ、大國ノ威儀ヲ見セシムベシトテ、秦王ニ奏シテ、大ニ筵席ヲ設ケ、諸侯ノ使者ヲ請ジ、是ヲ列テ厚ク欵待シ、次ニ莝ト豆トヲ一盆ニ盛リ、堂下ニヒキ下、馬ト共ニ須賈ニ喰ラハシム。須賈滿面ニ羞慚シテ、氣胸ニ塡、地下ニ伏テ馬ト共ニ啖。范雎又是ヲ責テ曰、今爾ガ一命ヲ許事ハ、咸陽ノ驛舍ニ於テ、吾ニ綈袍ヲ贈ル。尙故人ヲ戀意アルヲ以ノ故ナリ。且猴鼠ノ輩、之ヲ殺テ益ナシ。儞國ニ返テ魏王ニ報ジ、速ク魏齊ガ首ヲ斬テ來リ獻ヨ。然ズンバ兵ヲ發テ、汝ガ大梁城ヲ屠ン。須賈羞ヲ

文化十癸酉

含魏國ニ歸ル。魏齊ニ告。魏齊大ニ驚テ趙國ニ走リ、往テ故人平原君ガ家ニ匿ル。秦王之ヲ聞テ、詐テ好ミ書ヲ平原君ニ遣テ、之ヲ招ク。平原君秦ニ入テ昭讓王ニ見、今張君ノ仇君ガ家ニアリ。

○文化酉年十月、與風思ひ出して書す。八月鎌倉圓覺寺ニ於て死(シニ)たる事板行ニして、知己へ皆知らせけるに、誠に訪者且てなし。しかし市中のかまびすしく、亦熱海へかくれん事を思ひ、鎌倉のかれん共想ヒ、去年ハ京ニ居て、生涯爰に閑居事を決しけれど、予を知る者多くして、冬ニ至りて東都歸りぬ。今より四十四五年以前、金川に遊ビ、海を渡り、洲間辨天ニ行ク。聖天を祭ル出家ありけるが、庵室ノ中、只獨居て白ムクを着キ、机ニより。經文を摸寫して、庭ニハ海を望ミ、金川ノ方富士正面ニ見へ、誠に閑寂たる處なり。其所ノ者朝來りて飯汁などこしらへ、庭など拂ひ去ルのミ。予今世俗をいとひしに、此僧の志しこそとふとけれ。名利のきづなを切る事ハ、さても出來ぬ事なり。名の高く聞へたるハ西行なるに、名の不聞者、彼聖天の僧の如き、世にハいくらもあり。

然　然

○文化十癸酉十月二十九日、大納言様に若君様御誕生、諸大名惣獻上、公方様ハ當四十一歳ニて御孫を御もふけにて、かぎり無き御よろこびとぞ。

○豺狼喰人。而咽喉有骨。故絶飲食。于時鶴過狼之傍。狼呼曰。吾咽有骨。汝使長啄以去之乎。鶴畏而諾。遂去其骨。則狼曰。七日不得食。而已餓。即喰汝矣。（恩を讎て報ふと云たとへニて剛悪人のふるまゐ）

○豺狼欲喰人。人以鹿肉代於己。喰盡而後。亦欲喰其人。故與肉頻也。狼竟守門不去。故不能入盜賊於此家矣。（吾を害する悪者も、隨分忍びて德を以なづければ、還て身方となる。）

然　然　然

○一產而三虎焉。其二則相善。其一則與羊遊。及爲猛獸。其一則虎之質。而心者羊也。然虎矣。（あしきおそろしき者も、善人と交れば、自然と自然と能志しになれど、どふかすると虎ニなる。）

○群狙中有爲長者。能舞。衆狙揚聲稱譽焉。人其側有而謂。不足之非。則衆狙甚怒。而害其人矣。

人の短を云事なかれ。己の長をとく事なかれと云如く、他人ニ向て、善も非もムサト云べからず。

○人來而云。于市見狐於衆中。聽者怪之。而且不信。亦一人來而云。見狐於衆中。略疑之。亦

一人來。而三人竝口言。則遂信之。諂諛讒心。惑人如此。

白晝に、狐が人の群る中に居たと云てハ、どのよふな愚人ニても、ほんの事とハせぬ。三人口を揃へて、今見て來たと云バ、智者ニてもほんの事ジヤと思ふ。へつらゐ者、うそつき、人をあざむく。ゆだんすべからず。

○連日天雨頻也。洪水漲河焉。河伯得時乘。勇而躍游。遂自河出于海。則望四方。洋々而無際限。忙然而其知不及。

かつぱハ川に住て大雨の時、水の漲ルを悦び、向ふの岸、こなたの岸を游ぎあそびしが、ヒヨイと海へ出けり。かゝる限りも知れぬ大河もあるものかなと、あきれたり。吾日本支那の書を讀ミ、文字ハ世界中通用の者と思ひ、天竺の先、西洋の諸國ある事を知らず。文字も亦異て然り。

○蚊集而話。自古于今。希吸人之血者。其血味如甘露。漸入佳境。則人以手打。卽時失生焉。人能熟寢。則吸血良久。人未知之。遂腹裂而死。蚊ども相集て云ニハ、人の血を吸時、其味甘露の如

し。少し吸て去る時ハ、生を全す。過度する時ハ其身を失ふ。人酒を嗜、酒ハ微醉ニ呑、花ハ半開をたのしむ。程をしらずして、大酒すれバ、腹さけて死ぬ如し。然バ酒ニて身をあやまる者ハ、心ハ蚊ニてある。

○狸語狐曰。爰有釣狐餌。可恐哉。雖然其芬芳穿鼻。而欲喰之情切也。是所以爲獸乎。且人必有好物。以此物爲餌。則釣人易邪。曰。女。酒。金。

狸狐と話しす。爰に狐を取輪あり。餌ハ鼠の油

揚か。能きかほりにて之を喰へバ、いのちをしまふ事也。可恐とハ思へども、喰たひと云ハ、畜生のあさましさなり。爰以考るに、人の好む物を以、餌としたならバ、人も釣れそふな者とて、色慾、酒肴を餌とすれバ、人悉くわなに懸る。

○有人而取雀。雀曰。須教三善言焉。一曰雖有難忘。以可忘之。雖有後悔。以不可悔之。雖有過去不返。以不可念之矣。其人甚感於爰。即放其雀。雀飛上喬木而笑。以何乎笑也。雀曰。足下躬充五尺。智不足尺。乃吾腹中內在寶。恐失之。

彼一男子太怒曰。小雀爰欺我哉。復將捕之。雀漸側來曰。卽時今三敎忘耶。（頃刻）

○有刻面者。大概作其形。而穿眼先必小。而鼻大也。鼻非大。難成小矣。眼非小乃難成大。率作鼻目而後。爲全面之巧。

人事をなさんと欲るに、あやまちあらん事を初メに考思ふべし。**鼾**蝦夷の奥へ異國船ふゐニ來りて、大筒を放ツ。火術者皆あわてにげたり。吾日本火術を能すと雖も、戰爭ニ未用故也。向へ放ツ事のミ習ヒテ、未敵（テキ）する者ニ不逢。

○人以己爲優牛駝者。以己爲大。而蚊虻亦以己不爲小。猶視象牙而豕小乎。

人ハ自分一人利口と思ひ、且己の愚と云事を不知。故に、量けん違ヒ間違ヒを云とも、必ズ外よりとがむ不可。左樣で御座さる。御尤で御座ると、お座しきなりを云べし。小人愚人ハ人ニ勝ツ事のミを心得へ、從ふ事を知らず。（嗚呼かなしひ哉）

○蟻集會而曰。仰見天外。有生類。名爲人。其長十二万丈焉。米粒五万八千。一時爲食。蟻中在爲酋長者。曰汝等莫說。空談虛妄。

近年、吾黨唱蘭の學を務て、醫術、天文、支那の書に
なき事を知り、彼國皆窮理の學ニして地轉の說
あり。日月五星の高低を知り、及大小を測り、吾
地球も五星と同物ニして、日輪の繞りを廻りて
一年をなし、日輪ハ所を不移して地球旋轉する
故に、一晝一夜春夏秋冬をなす。此窮理を說く
に、聽者彼蟻の如し。

○有人而畜小鳥。或日忘與餌矣。鳥餓而已之喰
糞。則人側視之曰。小雀不知糞穢哉。小鳥聽而
云。足下有食物而後。糞其惡臭穢。然田畑以糞

種。不然不肥。太是無臭氣。故爲潔淸。
此空中の氣ハ如水ものにて、魚、水ニ游て水を知
らず。人、氣中ニ育されて其氣を知らず。糞穢
あれバ其臭を氣さそゐて鼻ニ入、鼻ニ入事口ニ
入る如し。もし糞臭味アリ、香芬ニあらバ、彼鳥
の如くならん。

○雞對孔雀曰。先生全身粧美錦。爲何乎。孔雀
不能答而曰。吾不知所爲何如矣。雞笑曰。粧外
者內無實。美錦方人之貌眼目而已。小子雖無粧。
常發聲告晝夜於時刻。足下自異國遠來。而吾國

之不成用。

おらんだ辭に孔雀をパーウと云。是ハ表向りつばに利口そふに見得て、思の外おろかなる者を云。亦表向のミかざりて、内證ハ表向と一向相違したるを云也。

○烏佯似鵜。還而呑水。烏向鵜曰。世人諺佯似汝。而還呑水焉。汝譽吾誹人不知也。汝無能而吾有能矣。嘗亦告人之嘉與患。常雖求食。不擇粗美。夫烏者栖樹。不栖水。亦曰汝喰以游魚。是不仁之甚哉。鵜瞋而不能答而已。

鵜ハ黑キ事如烏。亦無聲。海と河ニ居て家のかたわらに不住。烏ハ鳴聲やかましく、悪食をして、一躰かわゐげなし。故に人是をにくむ。人も見付あしくロヤかましく、人を誹りあなどる。己の自慢のミ云者をバ、能ありても皆人にくむ。

○道二の歌ニ、乞食のよんだ。

寢間のミ人にかわらぬ思ひ出を浮世に返す曉のかね

○西行の歌に、

來て見れバ爰も火宅の中なるに何住吉と人の云

らん

明神さまの返し。

よしあしと思ふ心を振すて丶只何となく住ハすミよし

鳴子をバ己が羽風におどろきて心とさハぐ村雀かな

○孟子ニ曰。不仁者可與言哉。安其危而利其菑(ワザハイ)。其亡樂所以者。

○山中鄙人。出都會地。而散歩市街焉。並家(比屋)百端。萬方列置表而賈矣。卑人駭然而喪膽。問曰。

我未視物多。爲何乎。

山中の農夫樵夫、常に鋤鍬鎌笠ミのの類のミ見知りて、初て都のちまたに來て見れバ、色〳〵見なれぬ物のミありて、是をあやしむ。

古への者ハ、此山中の人の如し。今ハ奢ニ長じける。

○生類一體者水也。火以動之。食以爲薪。薪盡火消。火消則不動。故水死矣。

生(活物)るひハ水で包んで火で動く薪を食ふて腹竈

○蛞蝓向蝸牛云。汝有家而從往處矣。吾亦裸而

扁額

無屋焉。旱天成脯。且如遊棍。憾哉。蝸牛答云。爾莫謂我在後者非屋。而藏臓腑處。天不雨則縮屈。而共之成乾物。

人分に應じて、我位ひの者を見てハ、あのよふニ家居を造りたひ者ジヤと、是に比らべ、あの樣に暮したひのと云者なり。又向ふの其人になれバ、同じ事、皆他をうらやむ。小人のふるまひ。

○鄙蘭人貢江都。淹旅館。發病將死。僥倖而病愈。於是設祝宴。其坐右在掛物。其画覆船圖也。此故問蘭人。蘭人曰。不可忘危之戒也。

吾日本の人、病ニ伏て死をまぬかれ、全快して床揚の祝ひとて、目出度物を取揃へ、床之間の掛物は鶴龜松竹を以て、これからハ一向にわづらハぬ樣に思ふハ、是不養生の初メなり。亦盜人用心するうちハ、不來。由斷したる處へはゐる。

咽元すぎれバあつさわすると云が如し。昔シ越王ハ吳の國ニとらわれたる、かんなんを忘れまじとて、毎朝熊の膽をなめたりと云。

○紫笛翁ノ哥に、

西行も牛もおやまも何も土に化たるいなり街道

世の中は狐狸のわなだらけかけると云て掛られにける

酒好ハ、酒やがわなをかけ。

○如是相。如是性。如是體。如是力。如是作。如是因。如是緣。如是果。如是報。如是本末究竟等。

三界唯一心。

十方佛土中。唯有一乘法。無二亦三。

○氣もつかづ目にも見得ねどいつの間にほこりのたまるたもとなりける。

○天地同根同性。始而知。衆生本來成佛。

○觀見法界。草木國土。悉皆成佛。

○實相無漏之大海。五塵六欲。雖不吹風。眞如不浪無日。

○輪扁斲車。以不能教其子焉。是所謂妙處也。

輪。クルマ　輻。ノヤトウシハク　輹。コシキ　軫。シン　軸。ジク　轅。ナガエ　皆以車爲名矣。妙與法以譬車。夫車能廻。故爲道。法道輪以三十六輻。中相輯而軫軸貫之。僅有郤。而此故廻。是謂之妙。○徐固之境爲甘。此故撓挑回。

夫以爲車爲法。莊子云。斲輪徐則ーテ而不固云。

輪扁は車匠なり。車の軫軸のはいる穴がかたく

てハ不廻。又やわらかでハがたつく。爰が妙處ニて、其すき間が程よく、郤て其間へ天の氣がはゐつて、車が能くめぐるなり。此妙ハ子ニも傳へられず、不云處なり。能く廻る故ニ車の道なり。又車の一躰の形ハ法なり。全具したる處を以車と名く。其軫木のほそ穴へ、あんばい能くはゐりて廻る處を、妙と云。妙とハ其郤の處へ天の氣が入てある故也。故ニ天氣妙をなす。天地の間の森羅萬造、天氣是を造る。是を妙とも、明德とも、神とも、佛とも謂也。

妖壽不貳不立
巖墻之下

○言、道、謂、云、稱、曰、說道。如何、若何、云何、盍何爲、孰謂、若爲、若箇、甚麼、孰愈、惡、安、焉、胡、奚。

○愀然而悲。胡然而日暮。

○人者逆心。不可順心。○孟子云。憂患生。安樂死。凡天地之間。物各有名分。不可踰。○似而非物。眞鍮似黃金。鈆錫似銀。水精似玉。愚人似廉直。佞人似智者。○邵玄同先生忍默恕退之作四卦。

○隣里欲高墻。親情欲遠方。

○鈆刀之一割。見此言知無弄物。

○少不動苦。老必艱辛。少能服勞。老必安逸。

○治國譬若張琴。大絃急則小絃絕。○短綆不可以汲深井。智鮮不可以與聖人之言。○千鈞之弩。不爲鼷鼠發機。○人之生質。有長處有短處。凡交遊。常見長處。勿見短處。

○富人之前。休說貧。貴人之前。無言窮。○水能載舟。又能覆舟。

○騏驥盛壯之時。一日而馳千里。至其衰老駑先之。

○井蛙不可以語海。夏虫不可以語氷。曲士不可

以語道。

○有不虞之譽。有求全之毀。

○修身以爲弓。矯思以爲矢。立義以爲的。

○孛木魯狲子羣公在翰林。則帝問曰。三教何最貴。公對曰。釋如黃金。道如白璧。儒如五穀。帝曰。然則儒賤耶。乎對曰。黃金白璧。雖無何妨。夫五穀於世不可闕。一日。帝大悅。

○虎嚙諸獸而至狐。狐曰。莫喰吾。命自天獸中之爲首焉。虎其所以問。狐曰。吾先而後可來。虎從行。諸獸畏服。謂之狐借虎威。

○學伎藝言語者。不知爲孰師。孰弟子焉。言能似也。今人身終。學孔顏者。何百一無似。

○衣垢不濯。黑缺不補。對人有慙色矣。行垢不濯。德缺不補。則尙對人無愧何哉。

○君子之聽議論者。如啖苦茗。森嚴之後。甘芳溢頰矣。小人之聽諂笑者。如嚼糖米。爽美後。寒沍凝腹。

○不知其子。視其所友。不知其君。視其所使。與善人居。如入芷蘭之室。久而不聞其香。則與之化矣。與惡人居。如入鮑魚肆。久而不聞其臭。

亦與之化矣。

○目があくとしゆらの街の大さわぎ耳より先ニ心あるから

○聖賢の教の書を讀と、身に謬りある事を知、君子とならん事を思ふ。佛經を誦バ、忽ち佛心を得る心地ぞする。是今、老翁となりたる所以なり。壯年の時此心あらざるハ、後悔如何ともする事なし。

○聖人之教。百萬一以貫之。

○佛經之教。百萬一信念佛。

○人有世。教者受教者。不可究理。

○盡理害己。中道以爲善。

○天明年間、京師學士恒亭主人字株子、天下ノ理一也。此ヲ以彼ヲ知ニスギズ。孺子ノ雞ヲミテ、民ヲ御スル術ヲ知ベシ。凡雞ヲ驅ル事急ナル時ハ驚ク。緩トキハトヾマル。急ナラズ緩カラズヤ安シ。民ヲ治ムルモ又此ゴトシ。猛ナレバ親マズ。寛ナレバ上ヲ犯。寛猛ノ間ヲ取ベシ。庖丁牛ヲ解ヲ聞テ、文惠君養生ノ術ヲ知、渾テ書ヲ讀ミ物ニ交ル事如此。胡亂ニ讀過シ、鹵莽ニ看過スル則ハ、一生己ガ爲ニナルベカラズ。山ヲ見テハ寂

然不動ノ理ヲ知リ、水ヲ見テハ道體無息ヲ悟、草木ニ就自家一般ノ意思ヲナシ、魚ヲ見バ自得ヲ觀ル。

○同乎万物生死。而復歸於無物者。暫聚之形。不與万物共盡。而卓然不朽者。後世之名。然名者。不可過乎千載矣。天起于無始。至於無終。人小而天大也。一百萬歲。以若一瞬。小慮哉。嗚呼。

○然不過乎名千載。天起于無始。至無終。

○春末遊于野外。視盛蓮華菜。其花百万。不可以數。希觀白花。於是感而考之曰。世人百万。

不可以數焉。古今世希生乎奇人。吾日本太閤秀吉。其餘雖有次之。蓮華菜白花。俟結實採之。來春蒔之。花悉歸於紅色。古根復不出芽。

○おらんだ銅板畫と云あり。畫法ハ經(スジ)を以濃淡とす。蘭書ニケンプルと云書物あり。是ハ日本の事を悉くかきたる書なり。其中日本人を圖あり。刀と脇差を右の方にさす。銅板ハ其畫を臨模する故也。彼國の細工人、日本人を不見故なり。

○去年ハ京都ニ居けるに、隣家も近くて、人の物言聞けれど、其辭柔(ナワラ)かニして、別て童子女の物云おも

しろく、心を慰めけり。今年ハ東都にかえり、大河原氏の別莊茶室ニ居て、庭の向ニハ裏屋あり、婦女小供の物云聞へける。是ハ近國の產の者ニて、其辭物云至て野卑ニして、聞くもわづらわしく思ひける。

文化癸酉冬十二月。

○骨董舗。飾表售諸器。有其中不售者。經年久焉。主人向其器曰。汝孰謂不應人之好哉。於是其器曰。夫測天之機。非知天理者。以不能辨之。算術之書。非知其術者。以不能用其書矣。魚目

燕石以爲玉。則魚目光而又如玉。世人知眞僞者鮮。故吾所以不售乎。

道具屋ニ、年を經て賣れざる物あり。用ひ方を不知故なり。是ハ天文の道具か、算法の書物か、世に好ク者希なれバ、買手なし。譬バ魚の目玉を以テ眞の玉ジヤ云バ、ほんの物ジヤと思ヒ、之(コレ)を寶とす。眞物ある事を知らず。上闇けれバ下亦上を欺く。

大坂十一屋五郎兵衞を闇に云なり。

○子子虫游於天水桶中。竟化蚊飛于天曰。奇哉。怪乎。兩翼自生。今方至空中。而望其水。水亦

如大地。而堅剛不能入其中矣。前(内)爲子子虫時。窺天。天方如砥而堅剛。遊於天氣中。而則不知其天氣。而游於水中。則不知其水矣。

ボウフり虫水中に居てハ水を知らず。蚊となつて飛バ、天の氣を知らず。氣ハ風ニして薄き水なり。水亦風ニして濃(コキ)風なり。魚水を離れ氣を飲バ死す。人氣を離れ、水を呑バ死。

○販食人張表而肉盛于數盆賈。則一人客來而喰乎數品。竟喰終而曰。各其味美也。公以何(イカン)。知(識)應人口之術耶。吾能知之。夫人雖無異。於眉目

鼻口焉。相似相不似矣。以一藝有爲名者。必非一藝。多能以秀於其中矣。吾且不厭雅俗。女爲想己者容。是故吾物敢所以無不售也。

爰に煮賣ヤ、見世に肉を煮付て售。一人買手來て二三品喰ふて曰、是ハ美味、どふして此樣に人の口ニかのふ樣にあんばゐするやと聞バ、亭主答云、人ハ目鼻同じ樣に付てあれど、皆違ひぬ。譬バ一藝に達する者、必一藝にあらず。多能なるものなり。私ハ雅人の俗人のとてわけへだてなく只向ふの氣ニ入樣に女の化粧して、男の氣に入樣が第一なり。吾心ニハ逆て、吾心に隨ふべからず。

○芝三島丁に住ける筑玄育とて、醫者にて筑前の國より來り、此地ニ二十餘年居けるとぞ。性酒ヲ好ミ、風流雅人をあゐし、墨畫之蘭をカキ、人紙一枚持來れ、數枚ニしてやりぬ。其數おびたゞし。世の人に多く交りて、おもしろき人なりしに、今ハ其子孫も絶へ、懇意の者も死に、蘭之畫も塵となり、其人を知る人もなし。僅に三四十年の中なり。此比于ミセニて、彼蘭の畫を見しより思ひ出シける。

○在少潺。自生虫。在僅乾土。自生草。此物從

何來也。大陽之氣。徹通大地焉。水火相混。而腐爛。其中自生活物。夫水者死陰。而火以爲神。草木不無心。動而發枝葉。故雷水火已。敢勿言五行。

すこしの水溜りにぼうふり虫を生ず。壁土のかわけるニも、水を灌(ソヽゲ)バ、自ら草を生ず。此二ツの物何方より來るや。無始の物ニて、日輪の火氣水土を照す時ハ、腐(クサ)レて活(イキ)者を生ず。是氣化なり。大地ハ水ニして、水火の二ツのミ。陰陽師五行と云。相生相剋など、理なき理を付、己を利する謀事也。

信濃の人ハ兎角一テツの短氣アル也

古へノ太宰(ザイ)深川親和芙蓉

必惑ふ不可。

○人の生付心庭(テイ)ハ、半年側(ソバ)に居て見れバ、大概知るもの也。左内と云男、信濃の生れニて、貌(カタチ)大キク、志しも甚粗ニして、萬端一向に取ゐなし。或時、八寸と云る足ノ付タル臺の、足一方損けれバ、夫を四五寸の釘を打けれバ、釘其足を貫て破裂て、脇へ出たり。此一事を以、推て不云。只妙ナルハ、貸たる金をさいそくする事、何度も行なり。これも又、人の出來ぬ事也。

○入鄉從鄉。 出淮南子

以餌取魚

○鳧脚鶴脛。長短不可思之。謂莊子。鳧脛雖短。續之則憂。鶴脛雖長。斷之則悲。

○以蠡測海。少智之云。

○蝸牛角鬪、、角上有國。左曰蠻氏。右曰觸氏。

爭地而戰。莊子田

○魚食其餌。乃牽於緡。人食其祿。乃服君。

○ある時、芝新堀と云處に、松平山城と云屋しきの裏門ニ、一人居て、外ニ居る人と話するを聞ニ、牛のほへる如し。其國の土民なるべし。國ハ出羽奥州ノ中なるべし。

○一年、京柳の馬場二條上ル處ニ居て、近所ニ風呂

屋あれ共むさし。夫故に、二條通り瓦丁ニ丁子風呂と云ハ、江戸の風呂似タリ。故ニ雨あがりニて、下駄ニて往ける路に、向フより十二三歳なる女子來る。謬て其子ノ足を下駄ニてけたりけるに、是ハイタミハせぬかと云ンとせしに、其子云ニハ、かんにんしておくれよと云けり。京に喧嘩なきハ、此一事を以知べし。

○蛙對蟹云。爾爲往耶。爲返耶。蟹答曰。足下雖有足不見步。啻蟻蹤已。謂他之非者。先正己。蛙不能答而去。蟹獨所謂。吾非往。非返。横行。

且不見横歩者。實可恥之甚哉。於是呼吾子曰。汝等必莫爲横行。

○圓然居士ハ、誠に理の能辨じ別りたる人ニて、先達予ニ、天文地轉の説を聞く。諸佛經ハ八萬法藏とて、須彌山より起りて、譬諭を説たる者ニて、多年佛説を好ミて、出家ト交り、夫故に魚類をも不喰。出家の様ニてありけるが、予と交りてより、佛經をも捨て、能く理を究の才人なるが、先達十五歳の三男を亡フ。其時、甚愁ヒて予ニ云ニハ、火の玉の燃て、戸の郤間より出たると話されける。何ケなる

才智ある人々も、愁ひニてハ本心を失ふ者と見得たり。

○播州辭、アスヤアサツテト云ヲ。アステリト云ト。

○老年不可往與壯士。君子不可會與才子。

○壬申ノ年、京ニ居ける時、押小路富小路西へ入處に、青陵と云儒者ハ、海保義平と云て、東都の人なり。今六十の内外ニして、甚ダおもしろき人なり。常に門人ニ云曰、吾親ゾクもなし。死タラバ火葬ニして、其骨を粉となし、大風時を俟て、天へ吹散シメ

ヨト。是天に歸ルと云事也。亦蘭說窮理を以テ、支那の書を譯し、談話おもしろき人ニて、佛法普現の像ヲ見テ云、總て譬諭ニして、大獸の上ニ童子のニウワなるが坐し、文珠も獅子の猛獸ニ坐したるハ、猛きおそろしき惡人ニハ、柔弱ニ向フ時ハ、勇事不能。還て德に服スと云諭也と。天王談と云書を、眞片假名ニ、何册にもかゝれけるが、其おもむき皆此きミ也。其時京に一年位居けるが、京ハ人物誠ニ上品ニして、野卑なる處なし。他國ノ者、童子より爰ニ居て長(ヒトヽ)なれバ、京の人となる也。然共人

に越へたる事出來ず。賞、名高技術ある人ハ、皆近國の者なり。近江の國ハ、京三條橋を東へ渡り、暫く行ケバ、粟田口なり。是ヨリ先ハ、近江なり。此國言語ハ京ニ似テあれど、志しハ甚ダ相違したり。京の街賈人、家號近江屋なる者甚ダ多し。

○御家人國助と云人、隱居して高桑立齋、銀座三丁目裏丁ニ假宅して居けるニ、文化　戊三月十六日の事也。彼立齋忰十四五歳のよし、上增寺中の寺に居て、赤羽へ用あつて參ゐて、三日歸り不申。夫所々さがし、漸く三日過て歸ゐ故、其子細を承ゐ處、

相州大山へ參候と申、お札守等持參いたしゐ。其札をもらひ申ゐ處の坊ハ、親の知る人なり。屆狀など持參ゐ。何やら、山伏躰の者連レ行たると申ゐ。則高桑立齋ハ、小子の畵の弟子也。毎〳〵も神かくしとて、兎角小童にさいの類に有ル事なれど、此度ハ目の當りの事也。何レ鳥の屬ニて飛者也。天狗の說なきにしもあらず。

○文化壬申ノ年、神仙座ノ家藏も賣拂ヒ、京ニ行生涯を終ラントテ、二月廿日ニ東都を發シテ、吉野ノ花を見、大和ノ國ヲ巡リ、四月一日京出、柳馬場ノ二

條にけるが、且テ親類共へ金子豫ケ置シニ、其金ヲ私用ニ遣ヒ失ヒシ事、京へ申來リ故、俄に冬十一月廿一日ニ京ヲ發シテ、江戸へ歸けるニ、神仙座ノ舊宅不賣共マヽアル故、先如舊ニ住ケレド、小子老衰して業ヲ務ル事不成故に、工夫シ、兼て左内ト云者、信濃ノ生レニテ、毎度爰來レリ。愚直ナル生れ付ニしてありけるが、春日藤左衞門と云者、近江ノ國ノ生れニて、今青山ニて與力トナリ居ける。此者金借シニて、金ノ不取古ル證文數通アリ。爰ニ於テ、左内ハ女房小共三人アリ。困窮ニ及ビ居タル

ヲ、藤左衛門自分屋舗ノ長やへ呼入、其金ノサイソク人ニ頼ミ、一向に不取ヲモ居ザイソクシテ、命ヲ不惜取立ケルに、藤左衛門其報ヲセズ、立腹して立サリ、牛丁丁人ノ家ニ居テ、女房小供ハ所々へ豫リ、喜兵衛ト云者ノ金ヲ、堺丁ノかし付、日々通ヒ、之ニテロヲ糊シ居テ、或時吾ガ歸タルヲ聞知リ、神仙座へ來リシなり。爰ニ於テ吾左内ニ云曰、吾金預ケ置しに取ず、汝此金ヲ取リナバ、汝ニあづけ、亦汝ヲ世つぎとすべし。此金百余あり。彼考思フ。百金ヲ高利に借ス時ハ、忽千金トナルベシト思ヒ、早

速承知シ、妻子ヲ連レ引越したり。夫ヨリ段々と貸したる金をセメ取、竟ニ百金ヲ取得テ、今殘二十兩トナル。然ニ其百金ヲ、諸々へ貸付、吾ハ隱居所ヲ建テ居キ。養ヒ毎月金2カント贈ル也。然シ、之ハ善智ニハ非ズ。且今思フニ、信州邊ノ人ハ、一躰生付剛直ニシテ愚ナリ。然ル故ニ、京ノ人ト違ヒ、事ヲ起ス事モする也。小金ヲ借ル者ハ身セマリ、如何トモスベキ事ナク、借ル故ニ返ス量ケンナシ。夫ヲ心能ク借ス故ニ、借ル者ハ誠ニ甘露ヲナメル如シ。故に、一向ニ返ス氣ナシ。然シ、夫ヲ不

取バ、大損ヲスル故、取立ル甚骨折あり。譬バ罪人アリ。セメ打ツテ其罪ヲ正ス。罪人氣絶ス。醫者側ニ居テ、氣付ノ藥ヲ用ヒテ、活タル所ヲ又セメ、又活シテハセメスルト同ジ事也。此商賣ハ、牢屋ノ罪人ヲセムルよりハ、少シ勝リタルカ。

天地理談

坤